

近自然河川工法とは？

—04・6・9 山脇正俊氏「近自然工学」講演を踏まえて—

1. 近自然工法とは

近年の環境破壊の進行は、近い将来に人類の破滅を招くと言う危機感を背景に「我々の豊かさ」と「環境」を両立させるのが「近自然学」である。

これを、「豊かさと環境の共生共存」「自然と人との共生共存」「地球の持続利用」などと言います。

共生共存を成功させるためには、河川、道路、都市計画、エネルギー利用、農林水産業日常生活などさまざまな分野での応用が必要です。この中で河川についての工法が「近自然河川工法」と呼ばれるものである。

そして、「近自然河川工法」と「多自然型川づくり」の理念は同じと位置付け、人間と地球環境の双方に配慮した河川改修法です。

人間のためとは、人命、財産、そして忘れてならないのが人間の「心」を守ることです。人間の心を守るとは、素晴らしいランドシャフト（五感+心：景観・景域・風景・風土情景）、つまり、気持ちの良い川を実現することです。

地球環境のためとは、水環境を健全化すること、そして自然のダイナミクス（侵食・堆積・洪水）を回復することです。自然なダイナミクスを実現すれば、エコシステム（生態系）のためにも、親水性のためにも、そして自浄力をたかめることにも、大きな貢献をします。

しかし、近自然河川工法にたいして、さまざまな誤解があり、失敗に学ぶという意味から、それらの誤解を列記すれば

- ・ 護岸のコンクリートを石積みにする
- ・ 蛇行させる
- ・ 法面や高水敷を緑化する
- ・ 魚を放流する
- ・ ビオトープを沢山つくる
- ・ 動植物の種の数、量を増やす
- ・ 桜堤、ホテル護岸、アユ釣り、コスモス畑、菜の花畑などをつくる
- ・ 河川庭園、親水公園などをつくる

正しい近自然河川工法とは？

- ・ 安全性確保と同時に地球環境の健全化を視野に入れる ←抽象的？
- ・ 自然の水循環／正常化 ←具体的には？
- ・ 時間経過を考慮に入れる →自然の働きを活かす／自然の川と見分けられない

- ・ 必要最低限のことをする（不必要なことをしない）
- ・ 土木・生態・景観などの共同作業を実現する
 - 土木・生態・景観の参加をプロジェクトチームの条件（1986年）
- ・ 環境の面から投資効果に配慮／環境に配慮した正しいコストダウン

2. どんな川が近自然工法の対象か

川には3つの領域があると位置付ける。

自然領域：人間の影響がないかほとんどない⇒保護・保全

近自然領域：人間の軽度の影響がある⇒近自然化

文化領域：人間の強い影響がある⇒徹底利用

中間の**近自然利用の川が近自然河川工法の対象**となる

- ・ 時間経過に配慮した川づくり⇒竣工が川づくりの始まり
 - ⇒20年後に素晴らしい川になるよう配慮
 - ⇒川は自然が造るもの／人は条件を与えるだけ
- ・ プロジェクトの役目はダイナミクス（侵食・堆積・洪水）の見極め
- ・ ランドシャフトによる心の復権をめざす
 - ⇒ランドシャフトを重視する事は心を重視する事
 - ⇒気持ちの良さの重要性を見直す
 - ⇒ランドシャフトは共有財産

以上から、**自然と隣接した住みやすい川づくり、街づくりをめざす**

3. 「里川」との接点及び関係性

こうして「近自然河川工法」の考え方を整理してみると、そこには、河川を主体として如何なる工法、土木技術を駆使するかにある。

近自然という言葉のとおり「自然に近い姿」を河川に復権させる事にある。勿論、工事に関わるのは人であるが、その人はあくまでも工事をする人、工事に関わる人であって、川と人との係わり合いとか、その川を仲介しての地域住民のコミュニケーションを意図するものではない。

工法、技術の背景となる「考え方」も、近自然学を踏まえて成り立っているのだが、コミュニケーション的意味合いを感じられるのは、

- ① ランドシャフトが我々人間の心の復権を目指している事
- ② 「近自然学」「近自然河川工法」を日本に広めるための情報交換とネットワーク活用が強調されている事

の2点しかない。その上、近自然河川工法の誤解として「ホテル、アユ釣り、河川花畑、親水広場など」人が川を使う事を容認しない姿勢が感じられる。

「里川」概念は、まだ漠としたものであるが、少なくとも「使いながら、協力して、守

り、育てる」川である。その関わりは、「参加」から一步踏み込んで「関わりを持続させる持続的な協力組織」にまで発展させなければならない。

そこには結構生々しい人間的な係わり合いとその生々しさを克服する合理的な組織、あるいはリーダーが不可欠である。

その意味において、「近自然河川工法」には人間的関わり感じない、技術レベルの展開となっている。ただ、注意しながら解釈すれば工法であるから、「近自然工法」として河川を改修した後は「川は自然が造るもの」として自然に任せる。問題は改修後のこの育て方に何かあるのか。

近自然河川工法の背景に人との関わりを何か期待するのか、自然に放置する事ではないのであろう。近自然工法が言う洪水、氾濫の脅威を理解、克服した上で新しい「川と人との係わり合い」を生み出すことが出来るのではないか。

さらに、「正しい近自然工法」が提案する「ランドシャフトによる心の復権」が共有財産と位置付け、気持ちの良さの重要性を強調している。近自然学の基本的考えが「自然と人との共生共存であり、目指すべき「地球資源の持続可能な利用」の仕組み作りをどのようにしていくのか、里川研究の視点で進展させねばならない。

関連資料

山脇正俊著 「近自然学」

山田厚志談----- 建設会社社長・環境共生まちづくりの会代表・日本技術士協会監事